プラスワン！

とん★ちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プラスワン！

【Ｎコード】
Ｎ３７０８Ｔ

【作者名】
とん★ちん

【あらすじ】
自称パンピー（ここでは普通すぎる人の意）で高校生の一ノ瀬愛美（いちのせめぐみ）は、中学時代の苦い思い出から立ち直れず、恋愛に臆病になっていた。

しかし高校２年の新学期を迎えてひと月たったある日、目立つことを避けてきた愛美の机の中に、イケメンの同級生、今井智也（いまいともや）からの手紙が入っていて・・・？！

プラス1！

～プラス1！～

世の中には俗に言う勝ち組と負け組というものが確かに存在していて、私はどちらかといえば負け組街道まっしぐらの状態なのだけれど、高校生になって同様に恋人がいない友達とひたすらだべるだけの毎日にそれなりの愛着をもつようになった今日この頃。

私自身の自己分析では、私の容姿は美的ランキング中の中くらい、いわゆる普通ってやつだ。

今まで、好きになった人は2人ほどいて、付き合ったことがあるのは1人だけ。

1人目は中学2年のころで、そのころはまわりの男子が気になりだして付き合うことが一種のパラメータにもなっていた時期だ。

もちろん長くは続かなかったのだけれど。

好きになって何を思ったのか電話で告白して、付き合うことを了承されたのだが。

了承されて、まいあがったあげく、しばらくそのまま電話で3分ほど会話をしていると、

「ごめん。やっぱ無理。」

なんと、付き合って3分で振られてしまったという私の苦い経験ランキング2位だ。

それでもなぜ2位かというのは、振られてしまったあとの話になる。

私が付き合ってから3分で振られたというのがなぜか中学校中に広まってしまい、『最速振られ女』と不名誉も甚だしいあだ名をつけられてしまったのだ。

うん。ダントツで1位だね。

これ以上苦い経験はないとみた。

そんなこんなで、付き合ったことがあるといっても、3分で振られてしまっているので、男性経験はおろか、男性免疫不全（命名は私）に陥っているといっても過言ではない。

そんな私のまわりに集まるのは、中学時代から一緒の友達のみならず高校のクラスメイトの女子数名と親友1人。

親友以外はだれも彼氏はいない。

私が彼氏を作らない人だとこいつらは思っているらしく、なぜかこの親友を除いた数名のリーダー的な立ち位置に治まっている。

冗談じゃあない。私だって彼氏ができるのならほしいのだ。

ただ、中学時代の苦い思い出をまだ引きずっているのは確かで。

そんな私に彼氏ができることもなく。

そして私は高校2年の春を迎え、ひと月がたったのだった。

・＊＊＊・＊＊＊・5月某日・＊＊＊・＊＊＊・

「起立、注目、礼。」

「「ありがとうございましたー。」」

高校の、というか学校の日常風景。

チャイムの音がなって、授業中の張りつめたソレから周りの空気が緩むのが私はたまらなく好きだったりする。

あの妙にほっとする感じは他では味わえないと思う。

一日を乗り切った～！って気がするのだ。

しかし、いまはその空気を味わっているどころではない。

先生の事務的な連絡事項を聞き流しながら、私はある重要な案件を抱えていた。

机の引き出しに隠すようにして置かれていたそれは、封筒だ。

『一ノ瀬　愛美様へ』

封筒にはそう書いてあった。

な、なんだこれは、俗に言うラヴ、い、いやラブレターってやつか？！

いやいやまてまて、私的美的ランキング中の中（むなしくなるので以下　パンピーとしよう）の私が人から好意をよせられるはずはない。

案外、千夏あたりのいたずらかもしれないじゃないか。

千夏は、私の数少ない中学からの親友にして、彼氏持ちという貴重な存在だ。

その千夏のいたずらというのが一番しっくりくる。

唯一彼氏もちなのに私の親友という意外性Ｎｏ１の彼女は、この程度のいたずらくらい平気でやってのけそうなものだ。

しかし、私の大胆な予想は封筒の裏を見たときにとんだ空振りに終わった。

『今井　智也』

い、今井智也（いまいともや）、君？？

どこのどなた様かすぐわかるある意味でこの高校の有名人だ。

男子の美的ランキング（私の独断と偏見）では５本の指に入る爽やかな顔をしたイケメンだ。

しかし、無口&人見知りも激しいという面があり、イマイチ（今井プラス智でイマイチ、ということらしい）、と言われている。

その見た目から、入学当初告白する女子が大量に出現したが、だれひとりとして了承されず、加えて断りかたもひどかったとの噂が一時期流れていた。

たしか彼のクラスは２－Ｂだったような・・・。

イケメンはチェック済みよ！

我ながら空しいチェックである。。。

でも、私のクラスは２－Ｄなので、彼と接する機会はほとんど皆無といっていいはず。

そんな彼から、わざわざ手紙？

封筒はしっかり封がされているので、筆箱からハサミをとりだして、そっと開封してみたが。。。

・・・・。

な、なんで私こんなに緊張してるんだろっ？！

まだラブレターかどうかもわからないのに、心臓のドキドキはもう隠せない。。。

よ、よし。

まずはトイレだ。

トイレに入って、ゆっくり読もう！

ここだとだれにのぞかれても文句はいえない。

そんなこんなで、ＨＲを終えたまだ騒がしい教室をそそくさと抜け出し、封筒を握りしめたまま個室に入る。

心を落ち着かせて・・・・。

・・・・。

私は勢いよく個室を飛び出すと、封筒をぐっしゃぐしゃにした。

信じられない信じられない！

なんと、その封筒には。

中身が、なかったのである。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

プラス1！（後書き）

まぁ、今井君は中身を入れ忘れちゃったんでしょうが、愛美はからかわれたのだと勘違いしている模様。

プラス2！（前書き）

いきなりですが智也視点の話。

プラス2！

俺の名前は今井　智也。

この私立　伯央（はくおう）高校に来たのは家が近かったから。ただそれだけだ。

なんとなく学校に行って、なんとなく授業をうけて、なんとなく帰る。

そんな生活をしていたせいか、俺は常に1人だった。

実は高校に入るまでずっとサッカーをしていたのだが、俺は自覚があるほど人見知りで、無口だ。

チームプレイが重要なスポーツほど、この無口は致命的となる。

まわりから孤立し、ある時からはもうパスがろくにまわってこなくなった。

そして俺は、サッカーをやめた。

ＴＶでみるメッシのように、個人プレーをするのにチームメイトを活かすようなとびぬけた才能もないので、俺はチームに必要のない人間も同然だった。

と、自分なりに考えている。

そんな俺は高校に入学したとたん、たくさんの女子から毎日のように告白されるようになった。

実は中学に入ってしばらくしてからも同様だったのだが、どうも俺はみてくれだけはいいらしく、満足に話したこともない奴だけでなく、顔も知らないようなやつまで様々な女子が連日俺に告白をしてきた。

この告白がまた最悪で、面と向かって、というのはいいと思うがどう考えても見た目がいい、という理由しか思いつかないような言葉なのだ。

『好きです。付き合ってください。』

もうこれで何度めだろう、という入れ替わり立ち替わりやってくる女子を目の前にして、俺は何を思ったのか初対面の女子に話しかけていた。

「俺のどこが好きなの」

「智也君がかっこいいからかなぁ」

「じゃあ、俺の見てくれ以外に好きなとこはないってわけ？」

「え・・・・」

「ほんと、勘弁してくれよ。俺だって毎日断るのにもううんざりなんだ。ほっといてくれ。」

「ひ、ひどい！」

「そうかな。俺は君らと満足に話したこともなければ、君の名前すらしらないよ？そんな人にいきなり告白されるってのは普通ないんじゃないかな。俺はよっぽどそっちのほうが理解できないよ。」

この一言が女子の間でそのままなのか誇張されてなのかはしらないが一気に広まって、ようやく俺は告白されることもなくなった。

同時に俺は「イマイチ君」などとよばれるようになり、2年になっ

てクラス替えをしたばかりの２－Ｂクラスでは当然周囲から浮いている。

そんな浮いている俺に話かけてくるのは、このクラスの学級委員長、前田健人（まえだけんと）くらいだろう。

「こら今井！！はやく家庭調査票をださんか！残ってるのはお前だけだぞ！」

この委員長はギャグ漫画からそのまま出てきたやつなんじゃないかと思うくらい濃いキャラをしている。

別にいやなやつではなく、むしろ浮いている奴にまで分け隔てなく接してくるこの姿勢は、ここにいるだれよりも信頼できるやつなんじゃないかと思う。

「・・・ほらよ」

「うむ。結構だ！　それはそうと今井。」

「うん？」

「お前噂に聞いてるよりずっとまじめなやつじゃないか」

「さぁな。噂がどんなもんかしらねぇけど、そんなこと気にしてないし」

「見たところ口は固そうだな。」

「あ？」

まぁ口が軽いわけがない。なぜなら俺は無口のイマイチ君なのだから。

そもそもなにか秘密等を聞いたところで、ばらすような人間がこの学校にはいない。

いや、どこにもか。

「それがな今井、いや智也とよばせてもらおう！実は折り入って相談があるのだ！」

いきなり名前で呼ばれたのに、不思議と悪い気がしないのはこいつの堂々とした態度のせいなのだろうか。

ま、どうせやることもないし、暇つぶしにはなるだろう。

「なんだ？」

「うむ、では放課後、図書室にきてくれ！」

ＨＲが終わって、俺はノロノロと図書室へ向かう。

図書室とか、１年の時のオリエンテーション以来足を運んだことがない、と健人に伝えると、

「ばかもん！！学校にいて図書室を利用しないなんて人生損しているぞ！！」

と、一蹴された。

人生損しているかどうかは別として、生徒のために用意された施設だ。

少しは利用してやるとしよう。

そう思って、木製のスライドドアをガラガラとあける。

「・・・・。（人っ子一人いねぇじゃん）」

なにが人生損しているだ。誰も利用してねぇじゃん。

もし健人が言っていることが本当なら、どれだけの人間が人生損してるんだよ。

やれやれ、と思いながら図書室に足を踏み入れる。

古い辞典コーナーが入り口の目の前というのがもう最悪だ。

俺の勝手なイメージだけれど、普通図書館の入り口付近には、新刊コーナーってやつがあるんじゃないのか？

それがなぜ開幕辞書なんだ。

この図書館の造りは相当古いらしく、歩くだけで床がミシミシと音をたてる。

どんだけオンボロなんだよここ。。。

すると扉の開く音がして、健人が入ってきた。

ギシギシギシギシ。

いやもう床抜けるだろこれ。

「はっはっはっ！　ようこそ我がベストプレイスへ！！」

こいつはこいつでなにいってるのかさっぱりわからん。

「・・・ベスト・・・なんだって？」

「ベストプレイスだ！！なんたってここは人っ子一人いないからな！」

「・・あ、そう。」

なんだろう。俺が言えた義理ではないが、こいつも相当さびしいやつなんじゃないのか。

あ、なんか急に親近感が。

「さて、そろそろ本題に移ろうか！！」

まださほど話してもいないがな。と頭で突っ込みを入れつつ頷いた。

「何を隠そう、前田健人はとある女子を好きになってしまったのだ！！」

「・・・はぁ。いまいち力になれそうにねぇな・・。」

よりにもよって恋愛がらみとは。。。

先ほどまでこいつに感じていた親近感はどこかに吹き飛ぶ。

入学式以降のことを思い返せば、俺の憂鬱は当然だった。

「そんなことはない！話を聞くだけでいいのだ！！」

「は？　どういうこと？」

「つまりだな、俺はお前に話を聞いてもらいたいだけであって、なにかをしてほしいとかじゃあない。いやもちろん、アドバイスがあるのならありがたく受け取るがな！」

「・・・はぁ。」

「まぁ聞け！　始まりはだな・・・」

こいつの話が異常に長いことを俺はここで初めて知ったのだった。

「と、いうわけなんだが」

「おーけー、もうしゃべるな」

こいつは軽く1時間近くもノンストップでしゃべり続けやがった。

おかげで状況はかなり理解できた。

噛み砕いて簡単に説明するとたぶんこんな感じだ。

まず、健人が好きになった相手の名前は一ノ瀬愛美。

現在のクラスは2－Dで健人曰く、見た目をわざと地味にしているが実はすごくかわいい、ということらしい。

きっかけは、休日に健人が本屋で参考書を熟読（そんなことするなら買えよ）していると、一ノ瀬が話しかけてきたとかなんとか。

たしか、『すみません、××××って本はどこですか？』だったか？

あろうことか店員と間違えられたのだが、健人はそのまま丁寧に場所を教えてやったそうなのだ。

「ふっ、あそこは俺の庭みたいなものだからな！！」

ドヤ顔の健人は置いといて、あまりにも丁寧に教えてくれたせいなのか、目的の本を見つけた一ノ瀬はこういったそうだ。

『あ、ありました！　ありがとうございます。　さすが店員さんですね！』

「店員なみの知識を持っていると一目で気がつくとは・・・さすが一ノ瀬！俺が好きになったことだけはある！」

いや健人、一ノ瀬をほめているようで、途中から自分褒めに移行してるからな。

加えてお前、たぶんいまだに本屋の店員さんと思われてるんじゃないか？

あれ、っていうか。

「お前どうやって名前知ったの？」

「お前はばかか智也、目の前にいるんだから本人に聞いたに決まってるだろう！」

バカはお前だ。。。

「そしたら一ノ瀬は普通に教えてくれたぞ？制服着てたからうちの高校の生徒だってことはすぐにわかったからな」

「なるほど・・・」

女子は不思議なことに休日でも制服着て外出することもあるらしいからなぁ。

まぁ、普通に部活だった、という線もあるだろうが。

とにかくその一ノ瀬ってやつ、絶対不審に思っただろうな・・・。

「うん？そうなのか？　あの急いで帰った感じはてっきりトイレにでもいきたいのかと思ったのだが」

お前・・・まじ気味悪がられてるってそれ・・・。

そんなこんなで、一ノ瀬愛美という女子の存在を、健人から教えてもらうことで俺は初めて知ったわけだ。

彼女がどんな人なのか知らないので、健人と並んで歩いているさまが、当然全く想像できないのだが。

健人はついで、

「それで、どう思う？」

と聞いてきた。

「どう思うとは？」

「今の話を聞いて、俺と一ノ瀬さんがうまくいくと思うか？」

正直いって思わない。明らかに店員さんに間違えられたうえ、不審に思われたに違いない。っていうかもうあの本屋にいかねぇんじゃ

ねぇの??

「うーん、まぁなんていうか、俺一ノ瀬さんみたことすらねぇしさ。今の状態じゃ情報もすくないし、何とも言えないよ。」

それもそうか、と健人は頷いた。

「じゃあ、明日とある場所にお前をつれてってやる。」

「は?」

「ま、だまってついてこいって。彼女が友人たちとよく行くお店があるのだ!」

「ちょ、おまっ・・・!」

こいつ、ストーカーでもしたのか?!そんな情報どこから・・・。

「馬鹿もん!この俺がそんな不埒な真似をするか!　順当に、彼女の取り巻きの友人から聞いたのだ!」

「へぇ・・・。」

一ノ瀬さんの友達に話しかけられるんだったら、もう本人に直接話しかければいいではないか。

といっても、俺にはできそうもないので、言わないでおく。

「ではまた明日な！」

「おう・・・。」

暇つぶしのつもりだったが、なんだか首を突っ込まないほうがよかった気がして、憂鬱な気分を隠せないまま、帰宅した俺だった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

プラス2！（後書き）

時系列的には、1話目の「プラス1！」で、無口な智也君が愛美に手紙を出す前段階の話になります。次回の「プラス3！」では、この「プラス2！」の続きとなります。

プラス３！（前書き）

今回の時系列は前話「プラス２！」からの続きです。

今回も智也君視点となります。

プラス3！

あくる日の放課後。

今日は健人から一ノ瀬さんがいく予定であるという場所に連れてってもらう約束だ。

はっきりいってめんどうだ。

一度もあったことのない、それも俺ではなく健人が好きな人に会いに行くというのに同行するというのは、どうなのだろうか。

うん、帰ろう。今日は授業中にさされまくった日だし、非常に疲れた。

とぼとぼ力なく歩きながら今日のことを思い返す。

だれしも経験があるのではないだろうか？

出席番号でその日付が近いと、授業中ことあるごとにさされるという、アレ。

今日は俺の出席番号の日だったというわけではないのだが。

知ってるか。

授業の最初に指されるほうが、実は楽だったりするんだぜ。

俺の出席番号は６番。

普段なら今日は指されない日だ。なぜなら、今日は４月１２日だ。

まぁ、まずは出席番号１２番の生徒をさすのはお決まりとして。

次に１３番にいくのが定石ってものだろう？

それなのに今日の授業を行った教師全員がこんなことを言い出すんだ。

「「「いつもいつも同じ法則じゃ、授業に緊張感がないよな（ですよね）」」」

ってことで、次は１８番がさされた。

さっきもいったが、授業の最初にさされるってのは、楽勝なおさわり部分の問題が多かったりするのだ。

だいたいその授業の５、６番目に指されると、内容に深く入っていたり、応用問題だったりして、答えづらくなる。

で、２４番の次が３０番。

ここまで言えばもうわかるよな。

３２人のＢクラスにはこれ以上とばせる人数がいない。

あろうことか、６の倍数できてるんだから、残るは６番。

すなわち、俺となる。

今日はめざましＴＶの占いがビリだったんじゃなかろうか。。。

５番目にことあるごとにさされ、どれもこれも難しい問だった俺は、精神的にかなり参ってるのだ。

やっとの思いで下駄箱に辿りつき、上履きをしまって正面玄関を抜けようとしたところで。

「智也！！」

・・・・・・。

待ち構えていたのだろう。健人に簡単につかまってしまった。

「さぁさぁ、智也！大船にのったつもりでついてこい！」

「はぁ・・・。」

なぜ大船に乗ったつもりになるのが俺なんだ。

健人の好きな人に会いに行くのに俺がついていくんだから、お前が安心する側じゃないのか？

まぁとりあえず、ついていくことにする。

校門をでて、どうやら駅の方向へ向かうようだ。

次第に車の通りが激しくなり、騒がしくなってきた。

あー・・。ほんと今日はつかれた。。。

帰ったらすぐ、風呂にはいって寝てしまおう。

そんなことを考えていたら、健人がとある店に入って行った。

どうやら洒落た喫茶店のようだ。

健人の思い人である一ノ瀬さんは、どうやらここでよく集まってお茶しているらしい。

こんな情報、健人なんかに良く教えてくれたもんだな、一ノ瀬さんの友達は。

もちっと警戒したほうがいいのではないだろうか。

そんなことを思っていると、健人が席に座ってこっちこっち、と手招いている。

男同士でなんでこんなとこ、と思いつつも、小走りで健人の向かい側の椅子に座った。

健人は携帯を取り出して、なにかを確認すると、

「ようし、くるようだ！」

などと言いだした。

ちょっとまて。なんだその情報。

健人に協力してるストーカー野郎でもいるのか？

「ふふふ。。。びっくりするなよ？」

「するか。っていうかお前の好きになった人だろうが。俺が好きになったらまずいだろう。」

「ん？ああ、なるほど。それもそうだな。」

全くもってこいつは何を考えてるんだ。恋愛事を誰かに相談したいって気持ちはわかるのだが、その人をわざわざ他人にみせる必要性がどこにあるというのだろう。

俺だったら、たぶんその人のことを知らない人間に、わざわざ紹介したりはしない。

ん？もしかして俺束縛したい方なのだろうか。

あーやめやめ。俺は恋愛事は苦手なんだ。

考えるだけ無駄だろう。

健人の好みがどの程度が見極めてやるくらいの気持ちでいいはずだ。

やがて健人が入り口の方を見て、

「きたぞ。」

ガチャっとドアが開く。

俺は人目もかまわず振り返った。

そこには、日本人形のごとく前髪を不自然に目元付近まで一直線でのばしている黒髪ストレートの女子と、非常に仲が良さそうな茶髪で活発そうな女子の2人が入ってきていた。

まぁ、茶髪の女子のほうは、どう考えても本屋の参考書コーナーなんかにはいなそうな見た目だったし、おそらく地味そうな黒髪ストレートの女子が、健人の思い人なんだろう。

ふーん。こいつ、普通っぽい子が好きなんだな。

あの子が好きと言われれば、まぁ健人のとなりを歩いていても、別に違和感なさそうだけどな。

「健人、あの黒髪さんと結構お似合いかもな。」

「何を言っている！お前はなにか勘違いをしているぞ！」

ええ～？まじかよ。ってことはまさかあっちの茶髪女子？

似あわねぇ・・・・だめだこりゃ・・・・。

まぁ意外性はかなりあるけどさ。

「お前好みおかしいかもな・・・」

っと軽くいったら、デコピンされた。

「いってぇな！なんで怒ってんだよ。」

「このドアホ！決めつけんのはまだはやい。いいから見とれ！」

今日は本当に最悪の日だ。。。

授業で指されまくったあげく、健人にデコピンまでされて、俺はこんなとこで何をしてるんだろうか。

こうなったらもう自棄だ！不自然だろうがお望み通り見てやるよ！

俺は2人の女子の観察を開始する。

ほんと、仲がいいんだな。じゃれあってるようにしか見えない。

ん？

茶髪女子が一瞬こっちを見たような気がしたのだが。

「なぁ、健人・・・」

「見ろ。」

「え？」

「いいから。」

「・・・？」

健人の言動に首を傾げつつ、俺は再び2人の方を見てみる。
茶髪女子が、黒髪女子の前髪をあげて、髪留めで丁寧に止めていく。
「・・・嘘だろ・・・。」
「目の前に映っている光景が全てだ。」
「だって・・・そんな。」
「俺も一ノ瀬さんのことを初めて見たときは気がつかなかったさ。だってあんな女子、千夏に知らされるまではうちの高校に存在していることすら知らなかったからな。」
健人が口にした千夏という名前すら、俺の耳には入っていなかった。
「だって俺ら高校2年だぞ?今までどうやったってだれかが。。。」
気がつくはずだ。だってあんな・・・。
「あることがきっかけで自分に自信がもてなくなり、それから様々なことにコンプレックスを感じるようになったそうだ。たとえば、自分の容姿が普通すぎるって感じにな。そして、額が広すぎるのではという『自己分析』から、前髪を伸ばすことでアレを隠している。」
日本人形のように一直線で長かった前髪がきれいに左右に分けられることで、霧が晴れるように大きな瞳が現れ、どこまでも自然でそれでいて可憐な顔が黒髪女子の正体、一ノ瀬さんであった。

思い返すのはこの言葉。

『智也君ってかっこいいから』

今さらになって思う。

こんなふうに告白してきた女子の大半に対して、俺は今すぐ土下座でもなんでもいいから、謝りたい。

顔が、身体が、汗ばんだように熱い。

「なぁ、健人。」

なぜかニヤニヤしながらこっちを見ている健人に対して俺は。

「一目惚れって言葉を信じるか？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

プラス3！（後書き）

まだプラス1！の時系列に追いついてません。

もうしわけないです。

見た目判断を否定してきた智也君が、一ノ瀬愛美に一目惚れしたという話でした。

プラス4！では、プラス3！における一ノ瀬愛美視点でお送りします。

プラス４！（前書き）

智也と健人が待ち構えている喫茶店に、愛美と千夏が向かう様子を描きます。
今回は主人公一ノ瀬愛美視点です。

時系列（プラス２！＆プラス３！＜プラス４！＜プラス１！）

プラス4！

「メグ～！！」

ＨＲを終え、教室が帰りのムード一色で騒がしくなった直後に親友の千夏が、あろうことか私の胸に飛び込んできた。

ぎゅうううっ

「い、いたい、いたい！千夏、離れてっ」

「ええ～メグつめたぁ～い」

そういって千夏は離れてくれた。

ええ、ええ。ごめんなさいね！痛いんですよ。

だって私、千夏と違って胸がないもんね！！

クッションって表現は、我ながらばからしいと思うが、私の胸は千夏の衝撃をやわれげてはくれなかった。

ふんだ。世の中Ｂカップくらいあればいいんだい！

千夏はたしか・・・Ｄ、だったかな・・・。

うぅ、なんて空しい差なんだろう。

「ほらほらメグ！　そんなことより私がこの前見つけた洒落た喫茶

店！　あそこいこ！」

「うん、いいよ～」

洒落た店など、私のような地味子がいけるような場所ではないのだろうけれど。

まぁ今日は流行の最先端をいく千夏が一緒だし、私が隣に立っていてもお客さんは見向きもしないはずだ。

いつもどおり、普通が一番！！

空気になっていればいいのだ。

ふっ。私が中学時代に培ったスキル（エアーマンと命名した）は伊達じゃないのだ！

高校に入学してからというもの、今までこのエアーマンスキルのおかげで大して目立つこともなく、周りに同化するように生活してきた。

効果は実証済みで、私の周りには千夏以外みんな私にちかい人達が集まってくる。

ただ1人茶髪の千夏を除けば、私達ははまさに黒髪パンピー集団の塊だ。

隠すなら森の中ってね！

まぎれれば怖いものなどないっ

「千夏、案内よろしく～　ん？」

携帯を取り出し、千夏はだれかにメールを打っているようだった。

「ん、これでよし。いこっか！」

「噂の彼氏か～？いいな～。いいかげん紹介してよ千夏～。」

「いずれね？」

「おうおう、ラブラブのようですなぁ、うらめしいうらめしいっ」

私は千夏の彼氏を見たことはない。話だけなら、千夏に毎日のように聞いているのだけれど。

千夏の話から推測する限りでは、イケメンで性格もよく、面倒見もいい男の人、という印象かな。

千夏はそういう素敵な出会いが出来ていいな～。

出会いと言えば、私はこの間、千夏の家に遊びに行った帰り、少女マンガを買いに本屋にいったのだが、置いてある場所がわからなかったため近くにいた店員さんに聞いたところ、その少女マンガの場所まで連れて行ってくれた。

さらに、そこに在庫の本が置いてないとわかると、本棚の下の引き出しをあけて、在庫を取り出してくれたのだ。

えらく感動し、この本屋さんすごい！！店員さんのレベル高いよっ

?！と思って礼を述べたところ、その店員さんが急に私の名前を聞いてきた。

せっかく感動していたのだが、いきなり名前を聞かれたこと、それに加えて私はその時千夏の髪留めによってデコまるだし状態で帰宅するという罰ゲームを受けていたこともあって、顔を凝視してくる店員さんに対して一応名前を答えた後、すぐに飛んで帰った。

あの本屋の店員さんは、私服でもおっけーなのかなーとおもいつつも、名前を聞いてくる不審な店員さんみたいだったし、残念だけどあの本屋にはもういかないことにしたのも新しい記憶である。

私の出会いなんて、所詮その程度だ。

はぁ～私も千夏みたいな出会いがほしいよぅ。。。

いやまぁ、パンピーの私には無理だけどねっ　と苦笑する。

知らず知らずのうちにそれが顔に出ていたのか、

「なに1人でニヤけてんの？バカがばれるよ？」

と千夏に爆笑された。

その背中めがけて、肘から突進をしたのは言うまでもない。

しばらく千夏のあとについて進んでいくと、周囲に下校途中の学生が多くなってきた。

この方向は駅に向かっているようだ。

さすが千夏だな～。私はこっちのほう、あまりこないからさっぱりわからない。

私立高校が近くにあるせいなのか、駅前は学生や帰宅途中のサラリーマンでごったがえしていた。

その駅前の一角にある本当に洒落た喫茶店に私達は入っていく。

「千夏はさすがだね～。ここに堂々と入る勇気は私にはないなー・・・。」

「そうでもないっしょ。あ、ほら。あそこあいてるよ！」

そういった千夏の後ろについていき、席に座る。

落ち着いた雰囲気がなんともいえない、すごくいい喫茶店だ。

学校帰りのカップルも、何人かみかける。

うわ、男2人で来てる人もいる？！

ど、どういう関係なんだろうか。

ぼ、ボーイズラブってジャンルにはまだ手をだせていないのだが・・・。

まわりの友達で好きな人が多くて、たまに話についていけなくなる。
親友だけあって、やっぱり千夏といるときが一番落ち着くなぁ。
そんなふうに思っていると、千夏が思い出したように話しかけてきた。
「ねね、メグってさぁ。なんでそんな風に前髪を不自然に伸ばして額隠すわけ？っていうか、額だけじゃなくて、目もかくれちゃってんじゃん。」
千夏さんや。そんな風にずけずけとストレートにいったら私でなくとも傷つきますよ？
「だって、私的分析では、私のおでこってすごく広いし。」
「そんなことないでしょ。」
「そんなことあるよ～。千夏みたいに活発な性格にもなれないから、まぁいってしまえば・・・」
「周りに溶け込むスキル、エアーマン状態なわけね？」
「そそ（笑）わかってるじゃん、さすが千夏っ」
っとけらけら笑う私を前に、ギラギラした千夏の眼があやしく光る。
「私さぁ～この間、メグがうちに来た時に気がついちゃったんだよね～。」

「な、なにに？」

「メグは、前髪をきちんとわけて、デコ隠さないほうが絶対かわいい！！」

「ええ～おでこ見せるの恥ずかしいもん・・・。」

「問答無用！この間の罰ゲームは継続中であるぞ！？」

ちょ。千夏さん、それはなくないですか！

いくらなんでも2日も前のことを掘り返されても困る。

それにここは人目も多いし、やっぱりはずかしいもの。

「いいのかな～。最速振られ女のあだ名が高校でも流れちゃっても～？」

「ええっ！！それだけはご勘弁を千夏様っ」

これは私たち2人だけの時の冗談トークだ。

みんなでいるときに決してこの手の冗談を言ってこない千夏に私は感謝すらしている。

本当にいい親友をもったものだよね私。

「さぁ、やるといったらやるの！そこになおれメグ！！」

あ、あれ？いつもはこれでおわるはずがっ！！　本当にやるの！？

前言撤回。

私の親友の腹の中は、実はデビル様かもしれません。

千夏がどこか一瞬遠くの方を見たような気がしたのだが、すぐにこちらに向き直ると、結局２日前と同じ状態にされてしまったのだった。

「・・・うん。私って、すごいいいところを発見するの、上手なのよね～」

「ほんと、このお店すごくいいね！さっすがっ」

「どあほう！」

意味もわからずデコピンされた。。。

「ちょ、ちょっと千夏！今おでこ全開なんだから、赤くなったらどうするの？！」

「メグはもっと自信もったほうがいいと思うな～。私ね、メグにお似合いの男性を前から探していたんだけど、うちの高校に結構ぴったりの奴がいたのよ。それでメグになんとかそいつと話してもらおうと思ってさ。」

「結構です！！！！！」

私は鏡を取り出すと、やっぱり赤くなってしまったおでこを隠すよ

うに髪留めを乱暴にはずし、元の状態へと戻す。

「あーもう。メグはすぐそんな髪型にする～。」

「おでこ広いのは嫌なの！」

「バカだなぁメグは。個性ってのはうまく引き出してやるだけで、人の印象ってのは全然かわるものなんだよ？」

ただし千夏に限る。ってこともあるんだよ。

私はこの時、愚かにもそんな風に思っていただけだった。

離れたところに男同士で座っている片方の男性が、千夏の彼氏で。

今日、千夏と千夏の彼氏が協力して動いていたことなど。

この時の私は、知る由もなかったのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

プラス４！（後書き）

メグの隠された美少女面を、最初に発見したのは親友の千夏ということになります。

察しの通り、千夏と健人は恋人同士で、このときすでにお互い協力して動いていました。

プラス５！（前書き）

今回は前田健人視点でお送りします。

人間観察と千夏が大好きな健人をお楽しみください。

プラス5！

そもそも俺が智也をこんな喫茶店まで連れてくることになった理由はただ一つ。

千夏に相談されたからだ。

2日ほど前のことになる。

親友である一ノ瀬愛美に、もっと自信をもってもらいたいという旨だったと記憶している。

千夏から話を一通り聞いた後、2人で遅くまで話しあった。

俺が思うに、恋愛事でマイナス面を感じてしまったというのなら、同じ恋愛事でそれを上回るプラス面をぶつけるしかないだろう。

俺も本屋で驚いたことだが、千夏はそれよりも興奮した様子で、前髪をあげたメグがあんなに可愛いとは思わなかった、と何度も言っていた。

だとすれば、イケメンの男子に告白でもされれば、自信を取り戻す

療法として十分だろう。

しかし、根本的な問題が発生した。

同級生でイケメンの男子とくれば、既に周りがほっとくはずもなく、現在フリーなのは1人もいなかったのである。

千夏が諦めかけた頃、俺に妙案が浮かぶ。

いるじゃないか。現在フリーのイケメン。

あろうことか、俺のクラスに。

あだ名はイマイチ君だが見た目だけは申し分ない。

さっそく思いつく限りの計画を提案したところ、千夏は最初こそ渋っていたが、親友のためなら、と了承してくれた。

そんなこんなで今に至るわけなのだ。

喫茶店まで目標人物を連れてきて、彼女の本来の素顔を確認させる

までは上出来だ。

さて、まずはここから始めようか、イマイチ君。

イマイチと呼ばれる君に、彼女(いちのせ)をプラスすることで、どのような変化が起こるのか。

さぁ、俺に見せてみろ。

「一目惚れって信じるか？」

…かかった。

千夏と俺の計画通り、智也は一ノ瀬さんの本来の可愛さに気がついてくれたようだ。

俺は大いに肯定する。

「もちろん信じるさ。本屋の時の俺もそうだったからな！」

智也はそこで、あせったように一ノ瀬さんから視線をはずした。

ふむ。

俺達の状況設定に気がついたか。

当然俺には千夏という彼女がいるが、智也にはそのことを話していない。

おそらく思考が、ここに来たそもそもの理由にようやく行き着いたのだろう。

くどいかもしれないが、ここに来たのは、俺の好きになった人を智也に紹介するため（という設定）だ。

今まで見た目だけで判断されていることを嫌って、女子に告白されるたびに断り続けてきた今井智也。

そんな智也がここに来た本来の目的を思い出したとして、それでも一ノ瀬愛美に見惚れてしまっているとしたら、今、智也にとってまさにここがターニングポイントとなる。

友人（仮）の好きだという設定と、自分の考え方を相手にしたとき、真正面から対峙できるかどうか。

さぁ、お前ならこんな時どうする？

なにかを考えていた様子の智也が動き出した。

突然、席から立ち上がると、

「・・・俺帰るわ。」

「急にどうした？」

俺の期待の塊がまるで砂になるかのごとく消え失せていくのがわかる。

こいつは所詮こんなものなのか？

あの一ノ瀬愛美なら、今井智也を変えられると踏んだのだが。

どうやら今井智也の方が期待はずれだったようだ。

結局イマイチ君のままだったか智也。

ここまで来て逃亡とは情けない。

「どうやら俺はこんなとこにいる場合じゃなかったようだ。」

「む？」

落胆したつもりだったのだが、智也の言動に若干の変化が起きている気がした。

「それでも健人、お前には感謝しないといけないな。ここに連れて

きてくれたこと。」

消えたはずの期待が、じわじわと沸き上がってくるのを感じる。

「ほんとありがとう。」

「なんだなんだ急に！」

「ただ、これだけはお前に言わなくちゃならない。俺……。」

やはり。

こいつならきっと。

「…俺、一ノ瀬さんに、完璧に惚れちまった。」

一ノ瀬愛美と一緒に変わっていけるんじゃないか？

あっぱれだ智也。

「わりぃな」

「ははははは！気にするな智也、それでいい！」

「・・おぅ。そんじゃな。」

「まて、智也。」

入り口に向かおうとする智也を俺は呼び止める。

「・・・なんだ？」

智也がゆっくりと振り返る。

「・・・コーヒー代、払っていけ。」

「・・・・。」

智也はコーヒー代を財布から取り出すと、テーブルの上に乱暴に置いて出て行った。

あやうく飲み逃げされるとこだったぜ・・・・。

さて、これで俺の役目は終わりだ。

今夜は千夏から、協力した褒美をいただくとしよう。

あとは智也、お前次第だ。

一ノ瀬愛美を、変えてやってくれ。

主に千夏の笑顔のためにな！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

プラス５！（後書き）

健人のキャラが変わりすぎです。

委員長キャラはわざとだったらしいです。

とにかく千夏ＬＯＶＥみたいですね。

千夏さんはこのあと大変だったようです。

プラス６！（前書き）

智也視点から物語はプラス１！に迫ります。

プラス6！

【今井智也視点】

初めて一ノ瀬を喫茶店で見てから、実に一カ月近くが経過した。

健人には本当に悪いことをしたと思っている。

しかし、俺も悪気があったわけではないのだ。

今なら、俺に告白してきた女子の気持ちが、ちょっとはわかる気がする。

恋愛感情においては、好きになる相手を何で判断したかという事に、正解なんてなかったんだな。

それが容姿であろうと、性格であろうと、財力であろうと。

人の好みは千差万別、絶対なんてありえないんだ。

彼女たちはそれがたまたま俺の容姿だっただけで。

たとえその中の誰かと付き合ったとして、長続きしなかったとしても。

好きなってくれてありがとう、と。

その気持ちをあの時の俺が抱いていたのなら、その後のなにかが変わったのだろうか。

こんな1人ぼっちの生活が、変わっていたのだろうか。

だが、それはそれ、である。

今の俺の心は、一ノ瀬愛美のことで一杯だ。

今まで何度もアプローチをしかけようとして失敗してきた。

いや、失敗したというのは違うな。

まじすまん、健人。

あれだけの発言をしておいて、いざ話しかけるとなったら勇気がで

ませんでした、はい。

好きになった相手に話しかけることが、これほど難しいとは思わなかった。

もともと会話が得意な方じゃないし、話しかけようとしても常に周りには彼女の取り巻きがいるのだ。

なぜ彼女はあれほど人に好かれているのだろうか。

今日も彼女は喫茶店に入ってきたときと同じ、日本人形のような髪型にしていた。

といっても、後ろ髪は肩までしかないので、前髪以外はほんと普通なのだが。

あの前髪のせいで、地味さが何倍も増幅されている。

しかし、ひと月たった今でも忘れはしない、あの時。

喫茶店で垣間見た彼女の本来の顔。

あの瞬間。

俺の心は見事に君にうばわれてしまったんだ。

なんとかして、彼女と接点をもちたい。

話してみたい。

君のことをしりたいんだ。一ノ瀬。

この想いを伝えるために、俺は何をすべきなのか、ひと月もの間ずっと考えてきたのだが。

さてどうしたものかな。

いまだに方針が決まらない俺は、1人屋上に来て物思いに耽っていた。

「こらっ、屋上は出入り禁止なんだぞ。」

すると突然、女子らしき声に注意され、俺は一瞬にして凍りつく。

誰かいたのか！？誰もいないと思ったからあえてここを選んだのに。

しかし、あたりを見回しても誰もいない。

声はたしか、あっちのほうから・・・。

屋上にはたいてい、はしごで上に登れる高所が存在する。

声の主はおそらくこの上だ。

つか出入り禁止なんだったらてめーもだろうが。

そう思いつつ、ゆっくりとはしごを登っていく。

すると上から声の主がひょこっと顔を出してきた。

「イマイチ君、だよね？」

俺はついこの間、過去の自分を本当に愚かだったと気が付いたばかりだ。

だからその呼ばれ方にイライラするようなことは、もうほとんどない。

事実、あの時の俺は本当にイマイチだったんだろうよ。

「あぁ。そういうお前はどこのだれで、こんなとこでなにをしている？」

「いやね～、夕焼け空を見ながら感傷に浸っていたら、下でブツブツとたそがれている君がいたものでね。」

こいつ名乗る気ないな。最後に聞いたことしか答えてねぇじゃん。

まぁ。別にいいけど。

ん。そうだ。こいつは俺をしっているけど、俺はこいつを知らない。

だったらこれは利用すべき状況かもしれない。

自力で答えを見つける以外無理だと思っていたけど、ここらで誰かに聞いてみるのもいいかもしれない。お互い損にも得にもならない関係のやつならちょうどいい。

「なぁ。ちょっと聞きたいことがあるんだが。いいか？」

「答えられることならね。」

「例えばさ、自分に、想いを伝えたい好きな相手がいるとして、でもその相手のまわりには常に人が集まってくる。こんな時、お前ならどうする？」

「それは、その相手に告白がしたいってことでいいのかな。」

「いや、話したいだけだ。」

「やっぱり君のことなのね。」

「・・・っ！」

アホか俺は！こんな話に例えばもくそもないだろっ！

こいつに、自分には好きな相手がいるけど話しかけられませんって言ってるのと変わらないじゃないか。

「・・・すまん。忘れてくれ。」

ため息混じりにそう言って、はしごを降りようとしたのだが。

「待って。今、考えてる。」

てっきり茶化されると思っていた俺は、変に肩透かしを食らった感じだ。

この女の子、あだ名くらいはしってるとはいえ、初対面の俺なんかのために、真剣に考えてくれてるのか？

「うん、おっけー。まとまった。」

「ほう。一体どうするんだ？」

正直、まじめに考えてもらえると思っていなかったので、不覚にも

こいつの人の良さに感心してしまった。

「手紙をかけばいいんじゃないかな。」

「は？」

そんなの、この俺がやったらかえっておかしいんじゃないか？

そもそも手紙なんて、いまどきどうなんだろ。

携帯電話が普及したことで、ラブレターって形式は減少傾向にあるのではないだろうか。

呼び出すならメールという手段だってあるしな。

まぁそもそもメールアドレスなんて知らないような仲だけどさ。

「うーん、それは・・・」

「あんた、噂通り本当にイマイチなのね。」

「・・・！　なんだと！？」

いくらイマイチというあだ名にイライラするのをやめたといっても、限度がある。

イマイチっていわれることで気分が良くなるはずはないし、それを本人の目の前で堂々と言うというのはどうなのだ？

ちょっと前にこいつに抱いた感心は、きれいさっぱり消えたように見えた。

だが、その考えも、彼女の一言で吹き飛んだ。

「だって、あんた自分守ろうとしてんじゃん。」

「な・・・。」

「手紙なんて俺がやるようなことじゃない。今更誰もやってもないし、恰好悪い。大方そんなことでも考えてたんじゃないの？」

・・・図星だ。こいつ、痛いところをいちいち突いてくるけど、言

ってることは全く間違ってないので、反論する気にもなれない。

「・・・そうかもしれない。・・・いや・・・たしかに、そうだ。あんたの言う通りだ。」

「あははっ。あんた、素直に認めるところはすごくいいね。」

「・・・何とでも言え。とにかく、アドバイスありがとよ。参考にさせてもらうわ。」

じゃ、とばかりに手をふって梯子をおりようとした俺に向かって、

「私、Aクラスの工藤楓(くどうかえで)。この時間には大体ここにいるから。」

と、言ってきた。

2ーAか。俺はBクラスだから、結構教室近かったんだな。

つか大体ここにいるって、どんだけ暇人なんだよ。

「あっそ。そんじゃまたな工藤。」

「こらこら。先輩にむかって。口のきき方には気をつけなさい？」

「なっ・・・。」

まじかよ。こいつ、3年の先輩だったのか。

「すみません、気がつかなくて。ではまた、工藤先輩」

「それでよろしい（笑）」

ひとまず、敬語を使って別れの挨拶をしたのち、やれやれと屋上の出口へと向かう。

俺は歩みを進めつつ、工藤先輩が言った手紙のことを真剣に考えていた。

手紙、手紙か。

うん、いいこときいたかもしれない。

そうときまれば、すぐにでも書こう。

どうせ誰も来ないであろう例の図書室で書きあげて、さっさと一ノ瀬の机の中にいれてしまおう。

俺は駆け足で階段を駆け降りると、図書室へ向かった。

よし、まぁこんなものだろう。

一ノ瀬のことを一目見て好きになってしまったこと、そして一ノ瀬と話してみたいということを、俺の言葉で正直につづったつもりだ。

これであとは一ノ瀬の机の中に入れてしまえば、確実にこの想いは伝わる。

「・・・ん？」

俺は、不自然な視線を背中に感じた。

この図書室、もしかしてだれかいる？

「だれかいるのか？」

返事はない。しかし気配は少し強くなった気がする。

「誰だか知らないが出てこいよ。こっちはコソコソのぞかれて、結構気分悪いんだぜ。」

「ほほう。」

この声・・・。まさか。

「よく気がついたな、智也。」

棚と棚の間からゆっくりと出てきたのは、うちのクラスの学級委員長、前田健人だった。

まぁベストプレイスとかいってたし、こいつならいてもおかしくないか。

ただ、今の俺はこいつと若干話しづらい関係になってしまっている。

気まずい空気が漂った気がしたので、俺はさっさと封筒をひったくると、

「そんじゃな。俺は帰るから。」

おぅまたな、といって健人は手を振ってきた。

そんな健人を無視して、封筒をカバンの中に入れた俺は、一ノ瀬の机がある教室まで足早にむかった。

【前田健人視点】

俺は智也が出て行った扉の方向を、じっと見ていた。

あいつはどうやら、手紙を書くことにしたらしい。

手紙なんて手をつかってくるとは、意外すぎるにもほどがあるぜ智也。

だからお前は面白い。

見ていて本当に飽きない奴だ。

さて俺も帰ろうかと思ったその時。

「ん？なんだこれ？」

俺の足元に、白い紙が落ちている。

拾い上げ、それが智也の手紙だと気がついた瞬間。

反射的に智也に届けてやろうと足を踏み出したのだが、それでは面白くないと歩みを止める。

この逆境、乗り越えられるか、智也。

一ノ瀬さんの机の中に入れる前に気がつくのかつかないのか。

さぁこんな時、お前ならどうする？

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

プラス6！（後書き）

工藤楓先輩、今後も話に結構絡んできます。

それはそうと、健人どんだけ腹黒なんだ、というお話。

次回はようやくプラス1！の続きで、主人公一ノ瀬愛美視点でお送りしたいと思います。

プラス7！（前書き）

ようやくプラス1！の続きとなります。

プラス7！

いったいどんな目的でこんなややこしい代物を私の机の中に入れたのか。

いやまぁ、たしかに勝手に勘違いしたのは私なのだけれど。

でも、封筒に中身がはいってないなんて、ほんと失礼しちゃうよ！

やっぱり私にはろくな出会いがない。

ほんとにちょっと、ごくわずかだけれど期待しちゃったじゃないか。

あ、こんな私でもこういう経験が出来るんだと。

しかし、ピッチャーの暴投をみすみすフルスイングしてしまった打者のような気分だなぁ。

なんていうのかな、もし自分がもっと冷静に分析をしていれば、こんな事態は避けられたはずだ、みたいな感じなのかな。

そもそも開ける前に、中身が入ってないことに気が付くべきだったんだよね。

こんなペラペラな封筒なんかそうはないだろうし。

ついさきほどまではこの封筒に書いてある差出人に対して大いに憤慨していたのだけれど、冷静になってみるとこの程度の悪戯で一喜一憂している自分が情けなくなってきた。

ふと、中学時代の失恋を思い出す。

私だって、本当は。

恋愛っていうのはするべきものなんかじゃなくて、気がついたらなっているようなものだってことくらいわかっていたはずなのだ。

それでも、学校とか職場という場において、男女が一緒の空間に存在していると、誰かのことを好きにならないといけないみたいな、妙な感覚にとらわれることがある。

その感覚、いや誘惑といっていいかもしれない。それに負けた結果が中学時代のアレなのではないだろうか。

彼氏がいる人がうらやましい。友達と恋愛トークで盛り上がりたい。

みんながみんなそんな理由というわけではない。本気で誰かを好きになって告白する人がほとんどだったことだろう。

でも、あの時の私は。

本気であの男子を好きになったから告白をした、というわけではなかったのかもしれない。

なぜなら、当時の好意を完全否定するわけではないが、今ではなぜ告白したのか、よくわからないからだ。

好きだなーって感じて、好きだなーって思って。

そして好きです、と電話で言った。

告白するまでは、たしかに本気だったはずなのだが。

けど、実際は私の中に何か別の思惑があって、それが電話の向こうの相手に伝わってしまったとか？

もしそうだとしたら、きっとそれで振られたのかも。

・・・そういえば振られた時、あの男子になんていわれたんだっけ。

『ごめん、やっぱ無理。だって、愛美は――――――――――。』

「――――い。」

あれ。思い出せない。

「――――――い、メグー？」

私は一体何を言われた？

「愛美ったら！！！」

「は、はいぃ！？」

しまった！考えすぎて、周りの声が聞こえてなかった！

振り返ると千夏がふくれて腕組みをしていた。

「親友をこれほどガン無視するとは、さてはなにかあったなー！？」

千夏は何かを察したかのように追及してくる。

ほんと、親友ながら恐ろしい子！

隠すことはできないか～。千夏の意見も聞いてみよう。

「これなんだけど・・・・」

私はぐしゃぐしゃになった封筒を千夏に見せる。

「は！？なにこれ！？・・・メグ宛ての手紙？・・・ふーん、そっかぁ。」

千夏は丁寧に封筒を広げ、ひっくり返すと、差出人をみて驚いた顔をした。

「え！？あ、うそまじで！？」

そうだよねぇ、そう思うよねぇ。私もついさっきまで、そんな感じに思ってたよ。

「やったじゃん、メグ！今井智也っていったらあの有名な・・・ってなんでこれこんなぐしゃぐしゃなの？」

ちょいちょい、っと私はハサミで開けた部分を指さす。

「・・・中身は？」

ぶんぶん、と私は首を振った。

「どゆこと？まさか入ってなかったとかじゃ・・・ないよね？」

「そのまさかです・・・。」

千夏はみるみる顔を紅潮させていくと突然携帯を取り出し、鬼の形相で誰かにメールを打っている。

「・・・私も悪いの。中身が入っていないことに気がつかないで、少しまいあがっちゃって。」

「メグは悪くない！！きっと何かの間違いよ！」

千夏はほんと、やさしいよね。さっきも1人じゃ泣いてしまいそうだったもの。

私は首を振る。

「ううん。そもそも、私が今井君に好かれる理由がないもの。だからこれはそれこそ何かの間違い。」

「違う、違うの。そうじゃなくて・・・！」

違うって、何が違うのだろうか。千夏は差出人の今井君と仲がいいとか？

どちらにせよ、冷静に考えればわかることだったのだ。

だって、わかっていれば未然に防げる感情だったのだから。

「千夏は気にしないで。私は今井君のことで思うところはなにもないの。誰かの悪戯かもしれないでしょう？」

「だったら、本人に確認するとか・・・」

入学当初何人もの女子に告白され、それらすべてを振ったというあの有名な今井君が、私のようなパンピーを相手にしてくれるとは思わない。

わたしは繰り返し首を振る。

「さ、これはもう終わった話なの。帰ろう、千夏。」

「・・・う、うん。」

私の揺るがない意思を感じたのか、千夏はそれ以上その話題について話さなくなった。

2人一緒に正面玄関に向かい、上履きを下駄箱にいれ、靴を取り出す。

私が靴に履き替え終わったところで、

「ごめん、メグ。やっぱり先帰ってて！」

と、私の返事も聞かずにどこかへ走っていってしまった。

1人、取り残された私は、ノロノロと歩きだし――――――。

信じられない光景を目のあたりにする。

「今井・・・君。」

玄関の向こうには、中身のない手紙の差出人、今井智也君が立っていた。

「・・・ども。」

あたりは茜色に染まり、校内にのこる生徒は部活をやっている生徒くらいだろう。

吹奏楽部の、終わらない練習音が鳴り続けている。

「・・・なにか、私に用ですか。」

なにもいってくれない様子だったので、早くここから逃げ出したかった私は、自ら切り出した。

すると今井君は少し面くらったような顔をして。

「・・・用っていうか・・・ちょっと一ノ瀬さんと、話してみたかっただけなんだけど・・・」

「用があるのなら、今度はちゃんと中身のある手紙にしてください。」

「え？」

「あんなの・・・ひどすぎます。」

そういって私は彼の横をすり抜けるように駆けだした。

なんだなんだ。

なんで私は泣いているんだ。

情けない情けない情けない。

あぁ、そうか。

私、ほんとに期待してたのか。

自転車置き場に置いてあった自転車に飛び乗ったまではいいのだが、いつのまに追いつかれたのか、目の前に息を上げた彼がいた。

「どいて・・・ください。」

「ちょっとまってくれ！なんであんたは泣いてるんだ！理由を教えてくれよ！」

その瞬間、私はかっとなって彼の頬を思い切りひっぱたいていた。

「人をもてあそぶようなことをして、何が楽しいの！？」

「なっ！？」

彼はよほど予期せぬ事態だったのか、叩かれた顔を押えて驚愕の表情をしている。

あぁ、彼の端正な顔が赤くなってしまった。

でも、もうとまらないよ・・・。

私は激昂する。

「さっきもいったでしょ！封筒だけなんて・・からかうだけじゃ物足りないっていうの！？なんであんな手紙を仕掛けた直後で私に会いに来れるの！？信じられない信じられない！あなたは私になにがしたいの！？」

少ないながらも、下校途中の生徒がこちらを振り返るのがわかる。

「えっ！？ちょっと待ってくれ、俺はきちんと君宛ての手紙を書いてあの封筒に・・・！」

「うそよ！あれには何も入ってなかったもの！」

「そ、そんなはずは・・・！・・・ま、まさか・・・」

あたりは茜色に染まる中、彼が青ざめているのがはっきりとわかる。

なんだろう、この違和感は。

私はてっきり、あの手紙を受け取った私の反応みたさに、わざわざ待ち構えていたのだと思ったのだけれど。

彼のこの反応は、本当に参っている様子だったのだ。彼も私も何か言おうとした。その時――――――。

「ちょっとまったあああああ！！！！」

周囲にとんでもなく響くこの声は、千夏である。

ちょ、めちゃくちゃ目立ってるじゃない！

ん、千夏が脇に抱えてるのは・・・・。

「健人！？」「あの時の店員さん！？」

千夏の脇にいる人物に、私も今井君も同時に驚きの声をもらした。

千夏はあの時の店員さんの首をぎりぎりと締めながらこちらに向かってくる。

「ぜんぶこいつのせいなの！！」

そういった千夏は店員さんを地面に放り出した。

「いってぇ～・・・よ、よう智也。すまねぇな・・・。」

力なく今井君にむかって挨拶をしたのはまぎれもなくあの時の・・・。

「どうしたんだ健人！いったい何が・・・！？」

「ほい、これ・・・。」

健人（？）君は今井君に向かって白い紙を手渡す。

「これは・・・！」

「お前が出て行ったあと、俺の足元に落ちてたんで大切に保・・・ぐあっ！！」

なぜか千夏が健人君の言葉をさえぎるようにして蹴りをかました。

「ちょ、ちょっと千夏・・・！」

「あーもう、この際だから全部種明かししちゃうわ！」

このあと千夏に聞かされた話によって、私と今井君が驚いたのはいうまでもない。

私が店員さんだと思っていた健人君は、実は千夏の彼氏で。

２人が協力していろいろしていたこと。

さらに、健人君が今井君の手紙を持っていたことなどなど。

今井君が健人君を一発だけ殴ってその場はひとまず治まったのだが。

私も彼に謝らなくてはならないだろう。

「あ、あの。今井、君・・・。」

「あ、なに？」

一発殴ってすっきりしたような顔の今井君が、急に緊張したような顔で振り返る。

「はたいてしまって、本当にごめんなさい！私の勘違いでこんなことに・・・」

「い、いやそんな！俺も中身を確認しないで封をしてしまって・・・本当にごめん・・・！」

ごん。

2人してあわてて謝ったため、お互いの頭部がぶつかってしまった。

「あっ　ご、ごめんなさいっ」

「い、いいっていいって。これくらい！あ、そうだ。」

今井君は、じゃあ改めて、と言って白い手紙を手渡してきた。

「ここに、俺が君に伝えたいことが書いてある。口下手だからこんな形にしちゃったけど、帰ってからでいいから、読んでくれ。」

「は、はひっ」

し、しまった。こんなときに噛んでしまったっ！

私はクスクス笑う彼を直視できず、真っ赤になってうつむいてしまった。

あたり一面を茜色に染めあげる燃えるような夕陽の中で。

彼と私はこうして出会ったのだった。

to be continued.

プラス7！（後書き）

愛美の勘違いが解けてよかったね智也君。ってお話。

ここから彼らの物語は始まります。

プラス８！（前書き）

手紙を受け取った愛美。

はたして智也はどんな手紙を書いていたのでしょうか。

プラス8！

私が両親と住んでいる場所は、ひと月ほど前に千夏といった喫茶店がある駅周辺とは反対方向である。

学園を中心に栄えているといっても過言ではないこの町の、役場を含む町機能の大半が駅周辺に固まっているせいなのか、私の帰り道は家に近づくほど閑散とし、道路には街灯がぽつりぽつりとあるだけになる。

なぜこれほどまで差が出るんだろう、というほどに人通りが少なくなり、周りは見渡す限りの田園地帯。

はっきりいいましょう。

夜の帰り道、まじ怖いです・・・。

いつもなら、私の足をこれでもかと酷使して自転車をこぎ、まるで夜の闇から逃げ帰るように家にたどり着くのだけれど。

今の私は、なんか変だ。

1人になって、冷静に考える時間ができ、自転車のスピードも次第に遅くなっていく。

トクン。

なんだろう、この感じは。

トクン、トクン。

なんだか、ひどくなつかしい気がする。

ふと、カバンに目を落とす。

中には、今井君から直接受け取った手紙が。

そして私の掌には、彼の頬をぶっ――――――――。

「うわぁああっ！」

私は自転車を完全に停止させた。

アホか私はっ！！

とんでもない勘違いのせいで、あろうことか全く悪くない人をぶってしまった！

私は、自分の掌をぎゅっと握りしめる。

トクン。

だ、だめだ。今の私は完全におかしい。

悪くない人をぶってしまった。もちろんそれも頭の中にはあるのだけれど。

まずは反省しなくてはならないと、わかってもいても。

彼の頬をぶった手が、熱い。

久しく忘れていたような、熱い感覚。

「う、うそでしょ・・・。」

思い出すのは、夕焼け色に染まる、彼の笑顔。

私はその場で、しゃがみこんでしまった。

「ただいまー・・・。」

「あら、遅かったわね。おかえり。」

家にようやく着いた時には、夜の8時をとうに過ぎていた頃だった。

あの場でうずくまっていた私は、よっぽど手紙をあそこで読んでしまえばよかったのではないか、と思うほどに、長時間動けずにいた。

しかし、手紙を取り出そうとカバンに手を伸ばすと、彼にこの手紙を渡された時のことが鮮明に思い出されて、開くこともままならなかったのだ。

普段の私ならあの暗闇の中に長時間滞在すること自体、ありえない話なのだけれど。

「愛美、もしかして外でご飯食べてきたんじゃないでしょうね？」

「食べてないー・・・おなかすいたよぉ～」

「あら、だったらいいわ。すぐ食べられるから、荷物置いてらっしゃいな。」

「はぁ～い。」

階段をゆっくり上がっていき、向かって右の奥が私の部屋だ。

カバンを机の上に置き、椅子に座る。

しばらくぼーっとカバンを眺めていたのだが、

ブルブルブルブルッ

「わぁっ」

携帯のバイブレーションによって我に返った。

あ、千夏からメールだ。

『やっほー（＊^―^＊）

おそらくメグのことだから、いまだに今井君からもらった手紙よんでないんでしょう？

あ、そんなことない？

もし読んでないんなら、ちゃっちゃと読むこと！

それじゃまた明日ね（@^^）／~~~』

千夏ってば、本当に鋭いというかなんというか。

時々、こっちの様子が常に見られてるんじゃないか、と思うほどに的確に状況を推測してくるんだよね。

まぁさすがの千夏でも、私が今帰ったことまではわからなかったか。

私は苦笑しつつ、それでもやっぱり千夏に感謝して、メールを返信した。

さて。

千夏からわざわざ言われたことだし、ではさっそく――――――。

「愛美、さっさとご飯たべちゃいなさーい」

・・・・・。

「ごちそうさまっ」

「おそまつさまでした。」

私は食器を流しに持っていくと、階段をかけあがった。

さて、あとは読むだけだ。

今井君が私に伝えたいことが、書いてある。

口下手だから、と彼は言った。

思えば、あの誤解が解けたときに、直接言ってくれてもよかったのだけれど。

こうして形あるもので渡されると・・・。

う、うん。非常に緊張する。

トクン、トクン。

さっきから心臓の高鳴りがとまらない。

封筒は私がぐしゃぐしゃにしてしまったため、彼から渡された手紙は折ってあるだけですぐ読めるようになっている。

私は、ゆっくりと白い手紙を開いていった。

『一ノ瀬へ

俺が一ノ瀬のことを知ったのは、本当に最近、それもついひと月ほど前のことです。

喫茶店に入ってきた君の、本来の素顔を見たとき、胸が異常に高鳴るのを感じました。

今までの俺は、一目惚れというものが理解できなかったのだけれど。

一ノ瀬に出会って、それがようやくわかったような気がします。

俺は、ありのままの素顔をみせた君に、一目惚れしました。

一ノ瀬のこと、まだ何にも知らないようなものだけれど。

だからもっと、君と話してみたい。

君のことを、もっと知りたい。

俺の想いが本当の意味で、一ノ瀬にちゃんと伝わるのか、検討もつかないけれど。

俺は、一ノ瀬愛美のことが好きです。

いきなり、付き合ってくれとはいいません。

まずはお互いのことを色々話せるような関係になれたら、と思っています。

もし、俺との関係を築いてくれる気があるのなら。

一ノ瀬さえよければ、前髪をあげて学校にきてほしいです。

今井智也』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ.

プラス８！（後書き）

前髪上げてきてほしいって、どんなおねがいだよｗ

ていうかよく考えたらまわりくらいんだから、帰り道じゃどっちみち手紙よめないですよねー・・・。

めんどうなのでそのままにしｔ（ｒｙ

プラス９！（前書き）

千夏視点でお送り致します。

プラス9！

いつから私とメグが親友の間柄になったのか、そんなのはもう覚えていない。

いつのまにか友達になっていて、いつのまにか親友になっていた。

ただ、勘違いしないでほしいのは、自論として友達というものが自然にできるとは、これっぽっちも考えていないということだ。

もちろん、理由なんかなくても気がついたらもう友達になっていた、って思う人も多いだろうけど、そこにはなにかしらの因果というものが存在しているように思うのだ。

例えばだけど、進級後の新学年・クラス替えの時は、とくに友達が作りやすい環境といえるでしょ？

逆に言えば、進級してしばらくたった後は、行事・イベント・授業の班分けなどがない限りは、友達が出来にくい環境ということだ。

人間関係の構築というものは、一度出来あがってしまうとなかなか崩しにくいものだし。

それが良好な関係であれ険悪な関係であれ、またリセットされるような出来事がない限り、最初から作りなおそうと無意識に思う人はそういないはずだ。

それは、自分の価値観・考え方にもいえることだと私は思う。

一度構築されてしまった価値観や考え方は個々によって違うために、なかなか他人によって変えられるものではないのだ。

そこに自分の考え方を揺るがしかねない衝撃でもない限りは。

メグは、中学時代の経験から、自分を卑下してみるようになってしまった。

好きな相手に告白して、上手くいくいかないに関わらず、甘酸っぱい思い出で済めばよかったのに。

メグはそれによって、考え方まで変わってしまった。

私が言うのもなんだけど、メグは中学時代に一部の男子からかなり人気があったのだ。

メグはそんなことに全く気が付いてないようだったけれど。

チャラチャラしたような作られた可愛さなんかではなく。

メグが纏っている空気、作り物ではない自然な可愛さ。

メグの魅力はそこにあると私は考えている。

しかし、自分を卑下するようになってから、メグは周囲に溶け込むように地味になっていった。

メグの髪型が急に変わった時には驚いたものだった。

纏っている空気だけでなく、見た目も含めて全て悪い方に変わってしまったのである。

それでも、言葉を交わせばやっぱりメグのままで。

話していて本当に心地良いのだ。

私は別に、絶対あの時のメグにもどってほしいと思っているわけではなかった。

いくら自分を卑下するようになって、見た目が変わってしまったメグでも。

少なくとも私だけはメグの良さを知っているから。

そう思っていた矢先、ひと月ほど前にメグが家に遊びにきた。

その時は確か、２人で兄貴が置いていった対戦格闘ゲームをしていた。

私のほうは、今は就職して自立してしまった兄貴に、よくこういった対戦ゲームに付き合わされていたのでこの手のゲームは得意だったりするのだが。

まぁ、メグはこの手のゲーム、本当に苦手でね。

千夏が強すぎるんだよぉ～、っとよく愚痴をこぼされたものだ。

それじゃあ、ということで私はハンディキャップを背負うことを提

案した。

腕に差がある人と闘ったりするときに、強い側と弱い側の差を少しでも埋めてくれるゲームの設定だ。

例えば、強い側と弱い側で受けるダメージが上下していたり、ＨＰに最初から差があったりするやつね。

するとメグは、それじゃあ千夏に悪いじゃない、と言ってきた。

こういうところに、メグは本当に気を使うんだから。

公正公平じゃないとダメなんだろう。

ま、そこもメグのいいところなんだけどね。

ということで、私はハンディキャップを背負う代わりに、もしそれでもメグが負けたらなんでもひとつ言うことを聞く、ということにした。

メグはそれなら、といって了承してくれた。

で、ゲーム開始したわけだけど。

それでも私の圧勝だったね。

ということで私がメグに何をしてもらおうかなーっと考えたのだが、これといって面白そうなことがなかった。

メグは、なんでもいいよっ、と胸の前で拳を握っている。

あぁもう！かぁいいな！！

もし私が男だったらこんな可愛い子、放っておかないのだけれど。

ま、メグのこのヘアスタイルの地味さからいえば仕方ないか。

ん？ヘアスタイル？

それだっ、といって私はメグに目を瞑らせる。

私の髪留めを使って、メグの髪を私の好みそのままにいじっていっ

た。

最後に前髪を・・・。

「・・・・・。」

私は目を瞑らせたままのメグを前にして、フリーズしてしまった。

中学時代も相当だったのだけれど、高校生になったメグの素顔はあの時のそれとは比較にならなかった。

良い意味で、すごく可愛らしく成長していた。

あ、やばい。私、女の子に目覚めちゃいそう！？

目を瞑るメグの可愛い唇を、発作的に奪いたくなる。

・・・おっと。話がそれたね。

とまぁこんな感じで、メグは髪をきちんとしてやるだけで、いつでもあの時以上の可愛さを取り戻すことができるのだ。

もちろん変われるのなら見た目だけじゃなく、自分にもっと自信をもってほしいっていうのもあるのだけれど。

悔しいけどそれは、私では無理だから。

今現在の希望としては、今井智也君。

彼に賭けるしかないだろう。

今井智也君の方もなにやら問題があるとか健ちゃんも言っていたけれど、もし2人で一緒に変われるのなら一石二鳥だとかなんとか・・・そんなことも言ってたっけ。

そういえば昨日、メグからメールの返信が来ていたけど。

今井君の手紙、ちゃんと読んだかなぁ。

たしか、『メールありがとう、また明日学校でね』としか書いてなかったけど、あのメグのことだ。

読むまでに相当時間を要したに違いないし。

あーもう！心配だなぁ！

それとも私が過保護すぎるのだろうか。

ま、これが私だから、しょうがない。

学校についたら、また洗いざらい聞いてやる～とか思って、今日もワクワクしながら学校へ向かったのだが。

なにやら校内の様子がおかしい。

２－Ｄのクラスか。どうやらあそこに異常な人だかりが出来ている。

な、なんだこれは。

さわいでいるのはほとんどが男子で、ちらほら女子の姿も見える。

すると背後から聞き覚えのある声がした。

「やっちまった・・・。」

「え？」

そこに立っていたのは、今井君だった。

こっちは何が起きているのかさっぱりわからない。

「ねぇ、どういうこと？朝からなんの騒ぎなの？美人転校生でもやってきたとか？」

冗談のつもりだった。ほんと、適当に聞いたにすぎなかったのだけれど。

「みんなからすればそんなものだよ。ほんと、バカなことを書いたもんだ。すごいうれしいはずなのに、同じくらい後悔してる自分がいるよ。」

そう言って彼はため息をつく。

だめだ、今井君に聞いても状況がさっぱりわからない。

ひとまず２－Ｄは私のクラスでもある。この人だかりをかき分けて入る権利はあるはずだ。

「はいはいー、ちょっとごめんよー、邪魔だからどいてー」

そういって私は人混みをかき分け、２－Ｄに入った。

「メグー、おは・・・」

入って、そして私は絶句する。

いつも同じ、地味な髪型だったメグ。

そのメグの席に座っているのは、どうやら顔を真っ赤にしているメグだ。

クラスメイトもみんなメグをみている。

うん、たしかにメグ、なのだけれど。

メグは私が貸していた、あの罰ゲームのときの髪留めを使っていて。

前髪もいつもの一直線なんかではなく。

非常に女の子らしい、ナチュラルな可愛さを溢れさせていた。

なぜメグがあの地味だった髪型を止めたのか、理由はしらない。

大方、今井君に聞けばわかりそうなものなのだろうけれど。

今はそんなことより。

たった今、この瞬間。

今日、ここにいる全員が。

そして学校中の生徒が、メグの本当の可愛さに気付いたんだ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

プラス９！（後書き）

メグさん、どんだけ可愛いんだよってお話。

ただよいしょするのも飽きてきたので、そろそろラブラブしていただこうかなと思っｔ（ｒｙ

次回は工藤先輩にもちょろっと登場していただくとします。

プラス１０！（前書き）

智也の望み通りの姿で登校した愛美。

それに対する智也の反応は――――。

プラス１０！

一ノ瀬が前髪を上げて学校に来てくれた。

その事実だけを見れば、俺との関係を築いてくれることを了承してくれたようなもので、本来なら飛び上がるほどうれしいはずなのに。

どうして俺は後先考えずに、あの手紙にそんなことを書いてしまったのだろう。

ちょっと前まで、彼女の素顔を知っているのは俺を含めたったの３人だったのに。

今となっては、この高校のほとんどの生徒が、一ノ瀬愛美の存在を再認識してしまったのだ。

彼女が学校に来た時の、みんなの反応を見れば一目瞭然だった。

もちろん中には、ずっと地味だった子がここにきていきなり目立っていることに対して毒づく人（主に女子）もいたが、ほとんどの人は一ノ瀬が実はすごく可愛いという事実を、いい意味で受け止めているようだった。

せっかく一ノ瀬が望み通りの姿で学校に来てくれたというのに、俺は一ノ瀬を訪ねることもなく、再び屋上に来ていた。

今は昼休み。昼飯の菓子パンをかじりつつ、俺はある人を待っていた。

「あら、今井君もお昼はここで食べるんだ？」

やっぱり来てくれた。

「・・・こんにちは、工藤先輩。」

そう、俺が待っていたのは工藤楓先輩だ。

一ノ瀬に手紙を出すというアドバイスをしてくれたのは他ならぬこの人であり、俺はまた彼女に話を聞いてもらいたかった。

「今日の朝はさわがしかったわねぇ。一体なんの騒ぎなの？」

「実はですね・・・。」

俺は、今までの経緯を説明する。

一ノ瀬に手紙を出したこと。

その手紙の大まかな内容。

彼女が望み通りの姿で学校に来てくれたこと。

その行為の意味する事等。

そして――――――。

「君は、うれしいはずなんだけど、同じくらい後悔もしている、と。」

「そうです。」

「ものすごい勝手だね。」

ククッ、っと先輩が笑う。

「おっしゃる通りですよ。俺は本当に勝手だ。自分で望んでいながら、いざ望み通りになった時に、どうしていいかわからなくなってしまって。」

「そしてその上私を頼る、なんてね。」

まったくですね、先輩。

「すみません。身勝手なのも承知で来たんです。」

他に頼れそうな人はいなかった。それに彼女なら、俺の悪いところを突いて、的確なアドバイスをしてくれると思ったのだ。

「一ノ瀬・・・どっかで聞いた名ね・・・。」

「知りあいなんですか？」

先輩は首を振り、なんでもないわ、と言った。

「そうねぇ、とりあえずは君の望み通りになったんだから、今度は

彼女の望みをかなえてあげるっていうのはどう？」

「それがわかれば苦労はしませんよ・・・。」

「だから・・・なんでわかんないのかなぁ。」

先輩は頭をくしゃっとかきむしる。

「君の手紙、自分で書いたんだから詳しい内容くらい覚えてるでしょ？」

「そりゃあ・・・。」

当然、俺の言葉でつづったのだから、全て覚えている。

「だったら話は簡単じゃない。今井君は、彼女に望み通りの姿で来てもらうことで、どうするって書いたの？」

「え？」

「つまり彼女は、今井君の何かしたいことに対しての返答として、

今の姿になって学校に来たわけでしょ？」

そうか！

俺は・・・ほんとバカだ。

「だったら、その返事に、あなたは応えてあげるべきなんじゃないの？」

何が全部覚えている、だ。

今の俺は、自分の言葉の意味がわかっていないのと変わらないじゃないか。

「・・・ありがとう、先輩っ！」

それだけ言って俺は走り出す。

「礼には及ぶよ～」

俺は背中に受けた言葉に苦笑する。

結構面白い人だよな、工藤先輩。

お礼に今度、菓子パンでも持っていこう。

俺は息を切らしながら、とある教室に向かって走り続ける。

もう言うまでもないだろう？

一ノ瀬と、話をしにいくのさ。

階段を一段飛ばしで駆け降りる。

昼休みだけあって、教室はどこも騒がしい。

ははっ、それでもこれからする事は目立つだろうなぁ。

俺はずっと無口なイマイチ君って呼ばれてきたのだけれど。

そんな噂や印象なんて、覆してしまいたいと思うほどに。

君の存在は、今の俺にとってすごく大きいんだ。

目的の扉を、俺は勢いよく開けた。

ガララッ

席に座っていた彼女が、Dクラスの生徒が、突然開いた扉に驚いたようにこちらを向いた。

「い、今井、君？」

よかった、いてくれた！

他のやつの視線なんて、どうでもいい。

「・・・一ノ瀬っ！」

「は、はひっ！」

彼女はお昼ご飯が済んで一息ついていたのか、健人の彼女である千夏さんと話していたところだったようだ。

よほど驚いたのか、この間手紙を渡した時と全く同じ噛み方をする一ノ瀬を見て、俺は笑ってしまう。

「・・・ごめん、今、時間いい？」

「え、えっと・・・」

彼女は千夏さんの方を見る。

千夏さんは手首を振って、いっといで、と小さな声で言った。

それを見てほっとした様子の一ノ瀬。

「あの・・・うん、大丈夫。」

どうやら親友にも了承してもらえたようだ。

俺は彼女に向かってそっと手を出す。

それを見た彼女は、顔を真っ赤にして俯きながら、同じようにそっと手を重ねてきた。

Dクラスの教室が、異常なほどに鎮まる中。

俺はほんのりと熱い彼女の手を引いて、ゆっくりと歩き出した。

to be continued.

プラス１０！（後書き）

工藤先輩。謎多き女性は美しい・・・かも。

とりあえず、智也君って結構大胆なのね。って話。

プラス１１！（前書き）

愛美が手紙を受け取ってからひと月。

誰が見ても明らかに相思相愛なのに、今井君との関係は未だはっきりしないまま。

そんな彼らに転機が訪れます。

プラス11！

私が今井君から手紙を渡されて、一カ月が過ぎようとしている。

気がつけばもう梅雨の時期が始まり、連日のように雨が降り続ける中、高校2年生の私たちは、中間テストの時期を迎えていた。

「あー、もー！はやく終わってくれないかなぁーテストぉ～」

HRが終わり、千夏がうなだれるように私にもたれかかってくる。

「そうだねぇ～、ま、仕方ないし、がんばろぉよ～」

私はそんな千夏を背中で支えながらカバンの中に教科書を詰め込んでいく。

「メグはいいよね～、この間の実力テストだって、学年順位12番でしょ～？」

あーんもう、神様は理不尽だ～っ、と千夏はさらに体重をのせてきた。

「そんなことといわれても・・・毎日復習だけでもしてればこれくらいは出来るよぉ」

「だからぁ～、その復習を出来るメグがうらやましいのぉ～」

だめだこりゃ。

千夏は本当、勉強だけが出来ないんだよね。

「今日も帰りに図書室寄っていくけど、千夏も一緒に来る？」

「あ～パスパス。あの空気の中にいたんじゃ私の身が持ちませんよ・・・。」

そっか、と私は頷いた。

心の中で、ほんのちょっぴりだけど喜んでいる自分がいる気がして、千夏に申し訳なく思う。

「あ～、メグったら喜んでるでしょ～？」

どきぃっ！！

ち、千夏ってば・・・油断も隙もあったものじゃないっ

「そ、そんなことないよっ！」

「はいはい、うれしいのもよくわかるけどね。あんたたち、どうせ一緒に勉強するのならもう少し楽しそうにしなさいよね～。」

余計なお世話だよっ、とだけ言って私はさっさと教室を後にする。

楽しいもん！今井君の成績は私なんかよりもっと上がっているんだからっ。

私は英語と国語が得意で、今井君は数学と物理を得意としている。

まさにベストカッ・・・いやいや、ナイスタッグじゃない！？

わからないところを聞ける相手がいるという事は、最高の勉強環境になるし！

それが誰もいない図書室なら、なおさらはかどるよね！

・・・うん。ほんとあそこって誰もいないよねー。

私と今井君は、そこで毎日放課後に勉強を教えあっている。

お互いが、それぞれの得意科目を勉強するときは先生役に徹するのだ。

千夏には、普通あんな人気のないとこで若い男女が2人っきりなら何かが起こってもおかしくないのにねぇ、とか言われたこともあったけど、そんな雰囲気になったことは一度もない。

・・・うん。ほんと一度もないよねー。

今井君はぶっきらぼうなところもあるけどほんとは優しいし、私が苦手な数学や物理も丁寧に教えてくれるし、放課後も一緒に帰るし、すごくいい友達だ。

・・・うん。ほんといい友達、だよね・・・。

私はもう恒例となった図書室のいつもの席に座ると、頭を抱えて唸る。

ひと月ほど前、私は今井君に手を引かれて図書室にいき、そこでお互いのことをしばらく話し合った。

彼や私の住んでいる場所のこと。

お互いの家が結構近かったので、うれしかったのを覚えている。

他には、彼がサッカーをやめた理由について。

もちろん、私の苦い思い出の話もした。

そんな他愛のない話のあと、彼からの提案で放課後、一緒に勉強するようになった。

最初は、もっと話をする時間を増やそうとのことだったのだが、今では真面目に勉強を教えあう時間になっている。

そんなこんなで私たちの成績が跳ね上がったわけだが、対して私と今井君の関係は進みも戻りもせず、まぁちょっとだけ進んだかな、

くらいの所で停滞している。

彼が私に好意を寄せていることは、直接もらったあの手紙からすでに伝わっているし。

私も・・・今ではたぶん、彼のことが好きなのだけれど。

でもあの手紙には私に好意を伝えるのと同時に、こうも書いてあったのだ。

『いきなり、付き合ってくれとはいいません。』

そんな訳で、今に至る。

・・・って、どんな訳だっ！？

こ、この状況って私から、付き合いましょう、って言うパターンなのっ！？

「あ、それはちょっとおかしくない？」

「・・・だよねぇ。」

いつも通り今井君との勉強が始まって、一時間。

数学の日なので、今井君が先生役だ。

今日の私は簡単なミスを連発し、どうも勉強に身が入らない。

っていうか、さっき考えたことが頭から離れないっ！

今井君はいつものように真面目に勉強をしているのに、今日の私は一体なにをやってるんだろうか・・・。

すると今井君が心配したように話しかけてくる。

「一ノ瀬、今日何かあった？」

「う、ううん、とりたててはなにも。」

うわっ、今井君も千夏並みの洞察力を持ってるの！？

もしかして顔に出てたかな・・・。

「そう？俺には何か考え事してるように見えたんだけど。」

「あ、えっと、ね。さっきから、なんか変だなぁって考えてたの。」

隠せないと思った私は、仕方なく思っていたことを告白する。

「へ、変かな？」

今井君は少しびくっとする。

あわてて私は言いかえる。

「あ、その、別に今井君が変というわけではなくて、変なのは私の方なの。」

「え、全然変なんかじゃないよ！今日もすごく・・・その。」

彼が突然顔を真っ赤にするので、私もつられて真っ赤になってしま

う。

そういう意味じゃなかったのだけれど・・・・。

「そ、その、すごく可愛いと思うし・・・・。」

「い、今井君・・・」

あ、あれ。

なんだこの空気。

今まで一度たりともならなかった空気に、この図書室が包まれているような気がした。

「一ノ瀬・・・・。」

彼が私を見つめてくる。

自然と、彼との距離が近くなった気がした。

彼の手が、私の手にそっと触れてくる。

――――――。

「ハイハイそこまで！」

「うわぁああっ！」「きゃあっ！」

図書室への突然の乱入者に私たちは思わず叫び声を上げてしまった。

な、なんなのいきなり！

「あなたが一ノ瀬さんね。」

上級生だろうか。長身のすらっとした女性がそこには立っていた。

女の私でも思うほどに、すごく綺麗な人だ。

「く、工藤先輩！？」

今井君の予想外の反応に私は言葉が詰まる。

今井君、この美人と知り合いなの！？

ズキ。

あ、あれ。

ズキズキ。

なんだろう、この胸を締め付けるような痛みは・・・。

まさかこれが、いわゆる嫉妬ってやつかな。

いや・・・違う。

この胸の痛みは。

私は・・・この人を知っている？

工藤、先輩。

たしか名前は・・・。

「工藤・・・楓、先輩？」

今井君がこちらを振り返り、えっ！？、と驚きの声をあげた。

「ずっと引っかかっていたのよ。一ノ瀬・・・どこかで聞いたことがあるかもって。」

納得した様子の彼女は、私に憐れむような表情を向けてきた。

だめ・・・この人は・・・。

「やっぱりあなただったのね、愛美さん。」

ついさっきまで、今井君のことで頭がいっぱいだったのに。

今の私は、中学時代の、あの苦い経験を思い出していた。

to be continued.

プラス１１！（後書き）

まぁ、始めからラブラブなのもつまんないので、とりあえずまだ付き合わせてません。

中学時代の例の男を踏み台にしようかなと思ってｍ（ｒｙ

プラス１２！（前書き）

楓さんによって愛美が無理に普通であろうとした理由が明かされます。

プラス１２！

図書室は異様な静けさに包まれていた。

まるでこの空間だけ世界から切り離されてしまったみたいに。

さっきまで、今井君とようやくいい雰囲気になれていたのに。

もしかしたら、お互いあのまま付き合ってください、と告白できたかも知れないのに。

私は突然の乱入者を見つめる。

彼女はまだ憐れむような視線を投げ続けていた。

やめて。

そんな目で、みないで、下さい。

楓さん…。

「工藤先輩は一ノ瀬の知り合いだったんですか。」

私達が続ける無言の空気をやぶったのは今井君だった。

彼は私の動揺を察知したのか、私を庇うような口調で楓さんに話しかける。

「あまりいい関係だったとは思えないんですけど、一ノ瀬になにか用なんですか？」

楓さんは、ふぅ、とため息をした後、ゆっくりとしゃべり出した。

「…そうね。用、というか、私は彼女に謝罪したいのよ。」

「…どういうことですか。」

今井君の声が驚くほど低くなる。

それに臆した様子もなく、楓さんはしゃべり続ける。

「正確には、私の弟が彼女に与えた影響に対して、私の方から謝りたい、ということかな。」

彼女の声が静かな図書室に響き渡る。

楓さんは何を言っているんだろう。

なぜ私が謝られるのだ。それも楓さんから。

「…意味が、よくわかりません。」

私の言葉を受けても、楓さんは目を逸らすこともなくこちらをじっと見つめてくる。

今井君はさっきから何か口を挟みたそうにしていたが、楓さんが手で制していた。

「…本当にわからないの？…私の弟、司のこと、もう覚えてないのかしら。」

覚えてない方がおかしい。

彼は私が中学時代に好きになった、３分間だけ付き合った相手だもの。

もっとも、たった3分間を付き合った、と表現するのはおかしいのかもしれないけれど。

それでも私にとって、到底忘れられない人であるのは確かだ。

「もちろん、覚えています。一度好きになった相手ですから。」

私は当然とばかりに言い切った。

今井君が少し暗い表情になった気がしたけれど、嘘をつくことは出来ない。

「今のあなたならわかるんじゃなくて？私は、司があなたを一度変えてしまった事について、謝っているの。」

私を一度、変えた？

確かに彼に好きになってもらおうと努力したこともあったし、彼か

ら受けた影響というのは小さいものではないと思うけれど。

それはそんな大事（おおごと）だっただろうか。

彼と付き合い、そして振られた私という事実がそこにはあるだけで。

彼の姉である楓さんに謝られるほどのことじゃないと思う。

「やっぱり理由がわかりません。振られたことを謝っているのなら
それはちょっと違うと思います。」

だってそうでしょう？

この世の中、上手くいく組み合わせと全くかみ合わない組み合わせ
が存在することは当然のことで、私はたまたま後者だったのだから。

もちろん、私自身の問題がそこには少なからずあるのだけど、そん
なことまで謝られていたらキリがない。

しかし、楓さんは相変わらず憐れむような表情のまま話し続けた。

「やっぱりね。あなたは自分がどうして司に振られたか覚えてない。いいえ、覚えてないってことはないわね。あなたは文字通り自分自身を作り替えて変わることで、忘れようとした。事実あなたは忘れているようだしね。今まではそれでよかったかもしれないけれど、あなたはまた変わったわね。自覚しているのかしら。あなたは生徒全員にその存在を再認識されているわ。有り体に言えばすごく可愛いってところね。あなたが思っている以上に、それこそ異常にあなたは可愛いのよ。見た目は勿論だけれど、容姿に合わせたようなその空気、オーラとでも言えばいいかしら。それをあなたは一度自覚したはずなの。私の弟、司の言葉でね。」

楓さんは畳み掛けるように言葉を紡ぐ。

私も今井君も、今は楓さんの言葉を待つばかりとなっている。

「司はあなたにこう言ったはずよ。」

あの時の記憶が…。

私の記憶が開けられていく。

――――。

「す、好きですっ私と…その、付き合って下さいっ」

私自身、電話で告白した理由が未だに不明なのだけれど。

確かに私はこう言った。

「ま、まじで!?俺…えと…」

そう、彼が困っている気がしたんだっけ。

「あ、だ、だめならいいのっ、だめならほんとに…」

彼は慌てた様子で返してきた。

「あ、違うよ!うれしくて…驚いただけ…」

「じゃ、じゃあいいの…?」

「…う、うん…。」

「…！あ、ありがとうっ」

この時私は飛び上がりそうになるのを必死にこらえていた気がする。

この時この瞬間、冗談でも大袈裟でもなく、工藤司という男子は私の心の中で大きな存在になったのだ。

他愛のない話をして、お互いの呼び方とかを恥ずかしがりながら決めたりもした。

そんなやり取りをしていると、彼が急に黙ってしまった。

「…？つ、司君？」

「…ごめん。」

「…え？」

「やっぱり無理だ。愛美とは付き合えないよ。」

頭が…真っ白になった気がした。

いや事実、私の思考は停止したに違いない。

それは受け入れたくない、聞きたくない言葉だったからだ。

「ど、どうして…？」

決して認めたくない言葉。

ついさっきまで舞い上がっていたのが嘘のようだった。

司君の言葉の思惑がわからないし、理解できなかったのだ。

「だって、

――――。

「・・・なぜなら、アナタが可愛い過ぎるから。」

楓さんはきっぱりと言い放った。

今井君が息を呑むのがわかった。

沈黙を貫いていた私達だけど、今井君が私の代わりに質問する。

「可愛い過ぎる…？それがいけないことだって言うんですか？」

「そうね。例えば今井君、あなたがなんと言おうと私は、アナタ自身は彼女の容姿に釣り合うだけの『モノ』を持っていると思うわ。それが容姿であれ人柄であれ、ね。うん、正直に言えば今井君は前者ね。」

「…それは正直過ぎますよね。」

今井君は表情を堅くする。

楓さんは気にした素振りもなく続ける。

「でも、司は今井君と違ったの。あくまで司自身が出した結論だけど、自分は愛美さんと釣り合うだけの『モノ』を持っていなかったと判断したのね。」

「でも弟さんの言い方だとまるで一ノ瀬が可愛いのが悪いと言ってるようなものじゃ…！」

そこで今井君は、はっとして私を見る。

「そう、愛美さんは今井君が今言ったように考えたんじゃないかしら。司に振られた原因は『可愛い過ぎる』点にあるんだ、てね。でもおそらくあの時の司は、愛美さんと付き合うことで自分が置かれる環境を考えたのね。彼女に釣り合うだけのモノがない自分は、一体周りになんて言われるのか。自分に自信が持てなくて、臆病になってしまったのでしょうね。」

「つまり、私が一度変わったというのは…」

司に言われて自ら普通であろうとしたアナタになった時ね、と楓さ

んはため息混じりに言った。

「だから、私が謝りたいのは、司の言い方が悪くて、アナタを悪い方に変えてしまったこと。まぁ、今のアナタは今井君と出会って変わったようだけれどね。私が言うのもなんだけど、アナタはもっと自信を持っていいと思うわ。司が『まだ』本気でアナタを好きなのだからね。」

楓さんは遠い目をしていた。

いや。ちょっとまった。

「…いま、なんて…」

楓さんはムスッとしてはき捨てるように繰り返す。

「だから、司はまだアナタの事が好きなのよ。こんど会う時はアナタに釣り合う男になってから、告白するって言ってたわ。」

司君が。

私を振った司君が。

私が好きだった司君が。

私のことを、いまでも好きでいるって？

「アナタはどうなのかしら。司が今アナタに告白してきたら、どうするつもり？」

楓さんは私から目を逸らすことなく聞いてきた。

今井君はさっきから黙ってしまっている。

今井君の方を見たのだけれど、少しも目を合わせてくれなかった。

私は――――――。

「司君に直接言われた訳でもありませんし、それを楓さんにお答えすることはできません。」

これでいいはず。

司君はたしか私とは全く違う場所の高校に行ってしまった。

もう会うことはほぼ皆無と言っていいだろうし。

いつまでも過去の恋愛を引きずるのは・・・もうやめたんだ。

「嘘をつき続ければそれは真実にもなる、ってところかしらね。まぁいいわ。」

嘘だって？

私が嘘をついているということだろうか。

「どういうことですか？」

いいの気にしないで、と楓さんは図書室から出て行った。

残された私たちの間に、微妙な空気と沈黙が訪れる。

「・・・帰ろうか。」

今井君の後ろを少し離れて歩く。

なんでこうなってしまったのだろう。

本当なら、もっと別な気分でこの廊下を歩いていたはずなのに。

そう思っていると今井君が急に立ち止まっていた。

それに気がつかなかった私は彼の背中にぶつかってしまう。

「あっ、ごめんなさい！」

一気に彼との距離が近くなったことで私は焦って離れようとした。

「一ノ瀬！」

「え・・・」

男の人特有の空気。

厚い胸板。がっちりとした腕。

彼に抱き締められているのだと気がつくのに私は数秒を要した。

「・・・ごめん、順序がおかしいのはわかってる。でも、できればこのままで聞いてほしい。」

私は彼の胸のところに顔があるので声が出せなかったため，なんとかして頷いてみた。

「俺がはっきりさせないままだったから、今まで友達みたいな関係だったけど・・・俺は、正直このままでもいいのかななんて思ってたんだ。でも、今日工藤先輩の話を聞いて、すごく悔しいって思った。その・・・なんで俺じゃないんだって。一ノ瀬と出会っているのがもっとはやければよかったって思ったんだ。これは俺の我がままだけど・・一ノ瀬の一番近くにいるのは俺であってほしいんだ。出会って間もないし、長い間好きだったわけでもないし、ほんとこんなに好きになるなんて思ってもみなかったよ。一ノ瀬は・・・俺にとってもう変わりなんていないたった一人の人なんだよ。」

彼の抱きしめる力が強くなるのを感じた。

しかしすぐその力は弱くなって、ばっと私から彼が離れる。

腕は相変わらず掴まれたままだ。

「だから・・・俺と、付き合ってください。絶対大切にするから・・・い、一ノ瀬?!」

頬を何かが流れた気がした。

「・・・あ、あれ?なんで・・・。」

なんで泣いてるんだろう、私。

今井君に告白されて、なんで私泣いてるの?

「あ、えと、ごめん!もしかして痛かった!?」

あわてて彼が私の腕を離す。

掴まれていた感覚は、ずいぶんと名残惜しい気がした。

答えは、決まっているはずだ。

今井君は私のことが好きで。

私も今井君のことが好きだと思う。

「あの・・・私っ」

「愛美！」

突然名前を呼ばれた私は、えっ、といって声の主の方を振り返る。

「おいアンタ、愛美から離れろよ！・・・なに泣かせてるんだ！」

懐かしい声。

見慣れない制服を着ている彼のことを、私はよく知っているつもりだ。

「な、お前こそ誰だよ！見たところウチの生徒じゃなさそうだし。」

顔こそあの頃とほとんど変わらないものの、表情からはあの頃と比べ物にならないものを感じる。

彼の名は――――。

「俺か？工藤司、２年だ。明日からここに転校するからよく覚えておけよな。」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

プラス１２！（後書き）

司登場。
展開が急すぎますが・・・がんばってついてきてね。
今井君の存在が薄い気が・・・。

プラス１３！（前書き）

長らくお待たせしました。
司が転校してきました。
なにやら波乱の予感・・・。

プラス13！

修羅場というのを経験したことがあるだろうか？

もちろん私はなかったけどねぇ。

産まれてきて今まで、複数の男性に囲まれるような状況なんて想像するほうが難しいような環境で生きてきたわけだし。

でも、なんでしょう。

環境って、いとも簡単に変わるものなんですね。

私は現在進行形でいわゆる修羅場？にいるようです…。

司君転校初日。

昼休み、彼は初日にもかかわらず私の教室にいきなりやってきて、私の前の席に座るクラスメイトを押しのけ、一緒に飯くおーっと言ってきた。

クラスメイトの視線が私達に集中する。

まわりの沈黙が痛い…。

は?!周りが黙っているのは私が原因か?!

何か言わなくてはと思っていると、教室の扉が勢いよく開き、一人の男子がツカツカと入ってきた。

今井君だった。

そして私の前に司君、横に今井君が座り、黙って食事をするという奇妙極まりない光景がそこにはあった。

あの時私が何を食べたのか…思い出すことはできない…。

なぜか千夏が一番面白そうにしていたのが気になった。

転校2日目。

昼休み、私は前日のことを踏まえて教室を早々に抜け出した。

同じ過ちは二度と起こさないためにね！

ひとまず学食に向かう。

昨日食べたものが何だかわからないのは食べ物にも失礼でしょう？

今日は食べたいものを食べるとしよう！

そう思って食券を買う列に並ぶと、ずいぶん前の方に今井君がいた。

声をかけられそうにない距離にいたので、話しかけるのを諦めて自分の番がくるのを待っていると、遥か後ろから私を呼ぶ声がするじゃないか。

…司君だった。

結局それを聞きつけた今井君も合流し、私の左右に二人が座るという奇妙すぎる光景がそこにはあった。

そして転校3日目。

周りの注目を浴びることに疲れ切っていること大だった私は、昼休みがくると何も言わずに屋上へ向かった。

あそこなら2人と会うという状況を想像するほうが難しい。

屋上の扉を開いた私の目には誰もいないはずの空間が広がっていた。

いたのだが。

屋上で菓子パンをかじること数分。

なぜか2人ともやってきた…。

つけられているのか私！？

不審すぎる2人の登場に私は思わず何故ここにいることがわかったのか尋ねた。

司君の答えー。

「姉ちゃんに教えてもらったー。」

今井君の答えー。

「…工藤先輩からメールがきたから…。」

…楓さん…。

そんなこんなで私の心が休まる日はなかったのである。

そして、司君転校４日目の放課後。

私の苦い思い出ランキング第１位をなんなく更新する出来事があまりにも唐突に起きた。

あらかじめいっておくけれど、司君に振られたことや最速振られ女のあだ名だって、私にとっては相当苦い経験だった。

しかしこの日の経験だけは、私が金輪際二度と経験したくはない恐

怖体験だったのだ。

それは、一通の手紙から始まった。

「一ノ瀬愛美さんへ、ね…。」

私の机の中に、差出人不明の封筒。

前も似たようなことなかったっけ…。

いやまぁ、あれは今井君からの手紙だとはっきりわかる普通の封筒だったけれど。

…中身がないのを除けばね。

しかし今回は差出人が誰だかわからない。

とりあえず開けてみようかな。

この間のことがあったからなのか、そのとき手紙を開けることになんの躊躇いもなかったのだ。

封筒の中身は…うん、ちゃんと入ってる。

我ながら何を確認してるんだと苦笑いしつつ、私は教室でその封筒の中身を開けてしまった。

後悔先に立たず、なんて言葉を考えた人…あなたは天才だ。

あるいは私がバカだった。

封筒の中身は写真が数枚と、殴り書きのような手紙が一枚。

写真には…。

「――――メグ！！！」

私は千夏に叫ばれるまで、何が起きているのか理解できなかった。

写真には、私が余すところなく、もれなく全裸で写っている。

正確には、私自身なのは顔だけで、身体はなんというか、ＡＶ女優の全裸写真を私の顔だけ組み合わせたようなコラ画像の写真だった。

それが数枚私の机に散乱し、それに気がついた千夏が隠すように写真をかき集めていた。

なんだろう…コレ。

コレは…なに？

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。

「メグ！しっかりして！…なに見てんだよ男子！！」

興味本位で写真を覗きに来た男子数名を、千夏が追い払う。

いやだイヤだ嫌だ。

吐き気がする…。

私はその場にうずくまってしまった。

「愛美さん、落ち着いたかしら？」

千夏の助けを借りてなんとか保健室にたどり着いた私は、千夏に事情を説明してもらい、保健室のベッドに横になっていた。

私は黙って頷いたものの、いまだに吐き気が止まらない気がしていた。

なんだったんだろう、あの写真…。

一体誰が。

なんのために？

「メグ、大丈夫？・・・・って大丈夫なわけないか。」

千夏が罰の悪そうな顔で覗き込んできた。

「ありがとう…平気だから。」

なんて言ってみたけれど、正直思った以上にショックを受けていた。

写真を送りつけてきた主の目的が私に精神攻撃をする事が目当てなのだとしたら、それはまんまと成功している。

やってくれるなぁ…。

「なんかしたのかな…私。」

「そんなこと…！」

千夏はそうやって庇ってくれるけど、もしかしたら私のせいで誰かが傷つき、苦しんでいたのかもしれない。思い当たることと言えば今井君とのことくらいだけど…。

例えば、誰かが今井君のことが好きだとしよう。好きな人が自分ではない誰かと一緒にご飯を食べたり，図書館で一緒に勉強をしていたり，要は仲良くしていたとしたら。

それはやっぱり、少しは嫉妬してしまうでしょ。

「でもそれは、仕方ないことだよ。メグは悪くないよ！」

「うん…。」

「誰も彼もが好きな人と上手くいく世界なんて存在しないの。誰かが選ばれたら、誰かが選ばれなかったってことなの。それはどうしようもないことだし、もしメグの言う通りだったとしても、メグから言えることはなにもない。何もないのよ…。」

私は送ってくと聞かない千夏をなんとか帰らせ、独り昇降口に来ていた。

千夏には気がつかれないようにしていたけど、さっきの封筒に入っていたのは写真だけじゃない。

そう、手紙だ。

乱暴に殴り書きしたような。

「千夏に見られる訳にはいかなかったもんね・・・。」

私はポケットからそっと手紙を取り出すと、内容を確認するべくもう一度開いてみた。

「一ノ瀬、呼び出し？」

「ひゃうっ」

余りに突然声をかけられたのでなんとも情けない声が出てしまった・・・。

目の前には今井君が立っていた。

「な、なんでもない、なんでもないから！」

そう言って私は身体の後ろに手紙を隠したのだが。

「1人で体育倉庫にこい、ねぇ。ベタすぎてわらっちまうな。」

「わわっ」

そういって後ろに隠していた手紙をひょいっと取り上げたのは司君。

「2人とも・・・なにして」

「決まってんだろ！メグを守りに来たんだよ！」

同意するように黙って頷く今井君。

「今井とはライバルだが今回は協力を仰いだんだ。確実にメグを守るためにはこれくらいしないとな。」

と司君。

「そういうこと。俺らにとっても許せないことなんだよ、今回のこ

とは。」

と今井君。

ちょっとまった。

違うクラスのこの2人がなぜ今日のことを知ってるの！

まぁ答えは決まってるようなものだけど。

「千夏ちゃんに聞いたぞ！」

「千夏さんが連絡くれた。」

千夏め・・・。

ほんとにお節介なんだから。

でも、確かにこれほど心強い人達は、他にいないかもしれない。

今日は、甘えておくとしよっか。

「じゃ、じゃあよろしくたのもうかなっ」

「まかせろ姫！」

ばこっ、と今井君が司君の頭を殴った音が廊下に響いていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

プラス１３！（後書き）

短い内容で申し訳ありません。
２人のナイトは姫を守れるのか（爆）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3708t/

プラスワン！

2011年7月6日07時44分発行